組合員のファイト通信

No.2

被災地に届けられた「おにぎり」の“重み”を再確認

岩手郡コープによる「復興支援・地産地消フェスタ」チャリティー企画

いわて生協

手作り品、くじ引き、綿アメ、ジュース販売と、盛りだくさんの「組合員活動コーナー」。

5月21日（土）と22日（日）、ベルフ牧野林（まきのばやし）店の駐車場で「がんばろう！岩手 復興支援・地産地消フェスタ」が開催された。被災地のメーカー・生産者、地元生産者と共に、岩手郡コープ※の組合員たちも、「おにぎり100g当てクイズ」や手作り品販売などのチャリティー企画で参加した。

なぜ100gのおにぎりなのだろうか。震災直後、いわて生協本部からの呼び掛けで集まった岩手郡コープを中心とした組合員は、「1日3,000個のおにぎり」を作って被災地に届ける活動に取り組んだ。この時、炊いたご飯を3,000個に分けてできたのが、1つ当たり100gのおにぎり。「小ぶりでも、できるだけ多くの被災者に届けたい」――参加した組合員たちは、その思いで必死に握ったという。

岩手郡コープ代表の大川原芳子（おおかわらよしこ）さんは、「100gって本当に小さいんです。その小さなおにぎりを食べて、被災者のかたがたが頑張ってくれたことを皆さんにお伝えしたくて、このクイズを企画しました」と話す。クイズに参加した子どもに声援を送っていたお母さんからも、「100gがこんなに少ないなんて。育ち盛りの子どもには酷な量ですよね。体験してみないと分からないものですね」という声があり、子どもが握ったおにぎりを大切に持ち帰っていた。

また岩手郡コープの組合員たちは、「沿岸地域にも、同じいわて生協の仲間たちがたくさんいる。地産地消フェスタでも、何かできることをやりたい」と、手作り雑貨を販売し、収益を募金することにした。

「イベントには被災地からも多くのメーカーや商店が参加しています。被災地の皆さんに、『私たちはずっと応援していますよ』ということを伝えたい思いもありました」と大川原さんは言う。

物も心も届けたい――。そんな気持ちを込めた組合員たちの復興支援活動は、今後も続けられていく。

（文・写真　早坂恵美）

※　いわて生協では、地域のくらしを大切にするため県内を16コープに分け運営している。

参加者は100gに最も近いおにぎり作りを競い、一番近かった人に賞品が贈られた。写真右でマイクを持っているのが岩手郡コープ代表の大川原芳子さん。